

じょうせつ
饒舌

客達の視線にいたたまれなくなった俺は、たまらず引き戸を開けて外に飛び出した。

憤懣^{ふんまん}やる方ない思いを抱えたまま、足もとに落ちていた黒っぽい石ころを思い切り蹴ると、そいつは俺自身も予想しなかったような速度で草むらに飛び込んだ。

もう何個か蹴り飛ばしてやろうか、いやそれとも今度はあそこの水溜り^{みずたま}に向かって投げてみようか、そんなどうしようもない事を大真面目に考える。

このもやもやとしたやるせない感情をどこかにやってしまいたい。全てを放り出して楽になりたい。そしてもちろん、そんな無責任な事が出来るはずもない。

「ちくしょうっ」

俺はむかつくほど青々とした空に向かって叫んだ。もう自分が何に対して怒っているのか、それすら解らなくなった。

……あいつが何をしたって云うんだ。

しばらくの間虚空を睨み続けた後、俺は自虐的に笑った。こんな事をして何の解決にもならない。もっと落ち着かなければ。

あと少しだけここに居よう。風に当たって頭を冷やした方が良い。

俺は食堂の前に設置されている飲料メーカーのロゴが入ったベンチに腰かけた。随分長いこと置きっ放しなようで、そいつは俺の体重がかかった瞬間大きな音をたてて軋んだ。あと一人でも誰かが座ったら壊れてしまいそうだ。

小刻みに震えるベンチの上で慎重に足を組んだ矢先、誰かがこちらへ向かって駆けて来る足音が右の方から聞こえてきた。何の気なしにそちらを見ると、足音の主は非常に田舎臭いデザインのセーラー服を着ている事が分かった。

彼女は俺の目の前をそのまま走って通り過ぎかけたが、どういふわけか俺の顔をちらっと見た瞬間「あっ」といって、左かかどでブレーキをかけて止まった。土がむき出しになっ

た路面でうっすらと砂埃が舞う。

「……ゆうくん？」

彼女……^{ふじた なお}藤田奈央は、もう一度良く確認しようとしてもいうのか、取りあえず下を向いていた俺の顔^{のぞ}を覗きこんだ。

「やっぱりゆうくんだ」

「……」

俺は返事をしなかった。何か面倒なことが起こりそうな気がしたからだ。

「今日で学校終わりなの知ってたんでしょ？」

「……おう」

「先生もみんなも心配してたよ？」

「……分かってる」

俺の余りにも暗い、そして薄い反応に戸惑ったのか、彼女は黙りこんだ。相変わらず座ったままの俺から目を逸らし、鞆を持った両手を後ろで組んで、びっくりする程白い足を不規則にぶらぶらさせていた。伝えたい事が伝えられずにもどかしそうな様子が、こちらからも十二分に判別出来た。

このままでは彼女が余りにも不憫な気がして、俺ははじめ

思ってもみなかった言葉を口にした。

「……ちょっと歩こう」

俺は奈央と並んで麓^{ふもと}の家までの道を歩いた。

この村は人口こそ少ないものの、小高い山の中腹からその裾野^{すその}にかけて小さな家々がぽつぽつと乱立していて、土地という観点で見るとかなりの広さを誇る。高台にある食堂まで通うのも一苦労だ。何しろ、村の最南端から最北端まで、ぐねぐねと曲がった細い坂道を延々と上り続けなければならないのだから。

俺達は今まさにその道を下っている。

「ご飯は、ちゃんと食べてるんだよね」

奈央が心配そうな声音で訊いた。そんな事を尋ねたところでどうするのかと苦笑した後、俺は務めて明るく答えた。

「朝は自分で何とかしてるし、昼はおっちゃんに助けってもらってるから大丈夫。夕飯は作る時間もたっぷりあるし、心配ない。有難いことにおすそ分けも沢山あるし」

「そう……良かった」

彼女はふうと息を吐いた。

「もしかして、心配してくれてたとか」

「当たり前でしょ」

二人の足音が重なる。乾いた地面を踏みしめる度に、砂粒がザッザッと音を立てて滑る。

不意に足音が一人分減った。

「おじさん……どうしてるかな」

奈央が唐突に立ち止まった事に気がつくまで、俺はしばらくかかった。振り向くと、既に数歩分の距離が開いていた。

「さあなあ」

俺は情けない声を出した。真面目に答える気にはなれなかった。そんな事をしたら、自分の中の何かが音を立てて崩れていくような気がしたのだ。

結局それ以上は何も返す言葉が無く、再び歩調を合わせて歩き始めた。

「……変だと思わなかった？」

俺は自分からも何か喋ろうと思い、少し遠慮がちに切り出した。

「何が？」

「今日の親父の報道」

「あ……ごめん。私今日寝坊しちゃったからニュースも新聞も見てないんだ」

奈央は心底申し訳なさそうな顔をした。質問した俺の方が悪い事をしたような気分になる。

「それで、どんな報道だったの？」

俺は一度咳払いした後、ニュースを見ている時に生じた微かな疑問を思うまま口にした。

「民放もNHKも同じなんだけど、親父の靴とストックが西門谷の谷底で発見されたって言ってた。逆に言えば、その二つだけが」

「えっ」

奈央の訝しげな顔を見て、俺は自分の考えが間違っていなかった事を悟った。普通はそういう反応をするだろう。

彼女の表情に勇気付けられた俺の口から、感情任せの言葉達が洪水のようにあふれ出す。

「おかしくないか？親父が谷で転落したって考えるんだっ

たら、当然、その、死体が見つかるはずだろ？靴とストックだけ見つかるなんてのは、まずあり得ないよ。転落の衝撃で靴が脱げて、ストックも一緒に吹っ飛んで、体だけどこかに行ってしまうっていう事になるから。絶対何か理由がある。ただの事故じゃなかったのかも。その二つしか現場に残らなかった訳があるはずなんだよ！でもテレビ局は、その事には一切触れてくれなかった。捜索隊の連中がどう思っているのかは帰って来ないと分からない。もし……」

一気にここまで語ったところで、俺は奈央が口をあけたままぽかんとした表情をしている事に気づいた。

「……奈央ちゃん？どうかした？」

奈央は両目をごしごしとこすった後、再び俺に視線を向けた。

「ゆうくんだよね？」

「は？」

「いや、いつものゆうくんじゃないみたいだから」

俺は首をかしげた。

「どういう意味だよ。いつもとどこが違うんだ？」

すると、奈央は一呼吸置いてから、はっきりと通る声で言っ

た。

「よく喋る」

……返す言葉も無かった。